

Museum News



絵：柳田 基

2017 春学期

展覧会

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

－ 大学昇格をめざして・上ヶ原移転物語 －

1929（昭和4）年3月、学院は創立の地、神戸原田の森を去り、西宮上ヶ原にやってきました。これは学院の発展、大学昇格を見越しての移転でした。上ヶ原校地選定や旧制大学誕生までの本学の歩みをご紹介します展示です。

同時開催 特集陳列

渡辺禎雄の版画でみる

イエスのほたるき

初めてキリスト教に触れる新生入生にむけて、聖書の中に出てくるイエスのたとえ話や奇跡をテーマにした版画作品を展示します。

2017.4.1（土）▶ 5.27（土）

企画展

日中のかげはし

－ 愛新覚羅溥儀家の軌跡 －

2017.6.5（月）▶ 7.22（土）

*詳細は4頁をご覧ください。

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

－ 学院を築いた4人の院長 －

2017.8.1（火）▶ 10.21（土）

大学博物館は2016年3月に

博物館相当施設に指定

博物館相当施設とは

現在、日本で博物館とか美術館、資料館などと呼ばれる施設は、全国に約5,700館があります。しかし、正式な博物館となると、4分の1ほどに減ってしまいます。

正式な博物館というのは、法規で定められた博物館という意味です。日本には博物館法という法律があり、そのなかで博物館が規定されています。所管地域の教育委員会の登録を受けた「登録博物館」、及びそれに相当する施設として指定された「博物館相当施設」の2種類があります。大学に付属する博物館は、法規上、後者になります。

文部科学省が2015年に実施した社会教育調査によると、登録博物館は888館、博物館相当施設が361館に対して、法定外の博物館類似施設は4,434館もあります。博物館の看板をかかげるのは自由ですが、法律に規定された博物館になるということは、義務と責任が生じます。

社会に開かれた博物館

博物館法第2条には、「博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と規定されています。博物館法は社会教育法の精神に基づいた法律ですから「一般公衆の利用に供し」とあるように、社会に広く開かれていなければなりません。

本学の博物館は、その設置趣意書に「地域に大きく貢献できる」博物館をめざすと謳っていますが、博物館相当施設に指定されたからには、謳い文句だけではなく、義務を負う

ことになります。

では、社会に開かれた博物館とは何でしょうか。それは本学の学生や教職員以外にも外部の人が博物館を自由に見学できるというだけのことではありません。大学の内側にだけ目を向けたような活動ではなく、地域ばかりか、広く日本、そしてグローバル化が進むこの現代にあっては世界的な視野で博物館資料を収集、展示し、さらに未来へ向かって大切な資料を保存していくことが求められるのです。

コレクションの充実を

資料の収集・保管・展示は、博物館のもっとも基本的な活動です。現在収蔵している資料を保管・展示することは当然のことですが、博物館を発展させるには収集活動を継続し、コレクションを充実させていくことが重要です。

収集と言えば、まずは資料の購入という方法を思い浮かべられるでしょうが、本学の博物館ではその予算が組まれていません。もちろん購入予算があることが望ましいのですが、収集の方法は購入だけではなく、寄贈を受けたり、寄託によっても資料を充実させることができます。博物館が保管する資料は、本学だけの財産ではなく、公共の財産です。大きさだと思われるかもしれませんが、紙切れ1片や布切れ1枚にも重要な情報が含まれることがあります。

本学はすでにヴォーリズ建築という貴重な文化財を有しています。この美しいキャンパスが地域のびどに開放されているように、大学博物館も博物館相当施設の指定を機にさらにコレクションを充実させ、社会に開かれた博物館として地域に貢献できるように願っています。

（大学博物館長 河上繁樹）

展覧会報告 I

企画展

神々の宿る布

—古代アンデスからのメッセージ—

3人の方からご寄贈いただいた本館が所蔵する古代アンデスの染織品コレクションをご紹介します。展覧会を開催しました。



2016.6.6 (月) ▶ 7.23 (土)
9:30 ~ 16:30 (日曜休館)

開館日数 42日
入館者数 1,855人

企画展

第40回キリスト教美術展

キリスト教美術協会が活躍する作家たちの作品とともに、同協会と関係の深い本学所蔵作家の作品もご紹介しました。



2016.10.8 (土) ▶ 12.17 (土)
9:30 ~ 16:30 (日曜、11月23日休館)

開館日数 60日
入館者数 4,933人

古代アンデスの染織品

祈りが込められた布

アンデス文明は、南アメリカのペルーを中心とした中央アンデスの山間や太平洋側の海岸地帯に発達した古代文明です。この地域は、標高 6,000m 級の山々が連なるアンデス山脈が太平洋岸に沿うように聳立ち、平地が少なく急峻な地形となっています。砂漠や高地、盆地などさまざまな環境が混在する厳しい自然環境のもとでアンデス文明は育まれました。このため、アンデスの染織品に表された文様には自然に対する畏怖が感じられます。自然界に存在する動物たちを神格化したものや、身近な動植物をモチーフとした豊かな日常生活を想像させるものもあり、多彩でユニークな表現が魅力です。またアンデス文明には、文字というものはありませんでした。言葉を文字にした代りに土器や染織品などに表される文様が大いに発達したのです。布は軽く折りたたんで運ぶことができるため、そこに表された文様は時に宗教的なシンボルやメッセージを伝える手段として重要な役割を果たしました。

今回展示したアンデスの染織品は、墓地に副葬品として埋葬されたものです。アンデスではミイラ化した遺体を多くの布で包み、埋葬する風習がありました。太平洋岸の海岸地帯は砂漠化しており湿度が低いため、墓地に埋められ密閉状態にあった染織品は数千年から数百年という昔につくられたものであるにもかかわらず、驚くほどに色鮮やかな姿をしています。

この展覧会を通じて、古代アンデスの染織品がもつエネルギー、その独特な装飾性や技巧を目の当たりにされて驚かれた方もいらっしゃるでしょう。そのような布をうみだしたアンデスという土地や風土、そこで生活した人々に思いを馳せながら、さまざまに想像を膨らませて布に込められたメッセージを感じていただきたいと思います。展覧会を企画しました。

ギャラリートーク

会期中、本館学芸スタッフによるギャラリートークを行いました。各スタッフの専門分野から古代アンデスについて語りました。

6月14日(火) 14:00~「神々の宿る布—古代アンデスからのメッセージ—」

6月28日(火) 14:00~「アンデスの音楽」

7月14日(木) 14:00~「古代アンデス文明の歴史—インカ帝国滅亡まで」

キリスト教美術

教派を超えた信仰の表現

本来、初期のキリスト教において、人為的に制作された絵画や彫刻は信仰の対象ではありませんでした。しかし、言葉の壁を超えて伝道するために美術はたいへん有効な手段となり、聖書を題材とした作品が数多く制作されてきました。一方で、古来の伝統を守るとうする東方正教会、美術を積極的に取り入れたカトリック、簡素を旨とするプロテスタントなど教派によって美術に対する考えはそれぞれに異なっています。そのような歴史を踏まえながらも、20世紀に始まったキリスト教の超教派による対話と和解、一致を目指すエキュメニカル運動に呼応して創作活動をおこなっているのがキリスト教美術協会です。同協会は、キリスト教の教派や美術団体の会派、その所属の有無を問わずキリスト教の精神を基にして集まった美術家たちの団体です。「キリスト教美術展」は同協会が発足した翌年の1973年にはじまり、教派を超えた美術家の作品発表の場として、また個々の信仰を表現し福音を証する場として毎年のように開催され、2016年で第40回を迎えました。その記念すべき美術展を、東京会場(2016年6月28日(火)~7月15日(金)、於 銀座教会・東京福音会センター)だけではなく本館においても開催することができました。大学博物館が共催するというかたちは今回が初めてです。

関西学院は、米国の南メソジスト監督教会の宣教師 W. R. ランバスによって1889年に創設され、現在まで一貫してキリスト教主義にもとづく教育がおこなわれてきました。そのため学院にはキリスト教美術が多数所蔵されています。本館では東京会場の出品作と内容を変え、同協会が活躍する作家たちの作品とともに、学院所蔵の作品の中から同協会と関係の深い田中忠雄、渡辺禎雄、堀江優、鴨居玲の4作品を展示しました。

開催記念講演会とギャラリートーク

会期初日の10月8日(土)には、山梨英和学院理事長・大学長のジョージ・W・ギッシュさんによる「イエスの視点を表現する美術とは・・・」と題した、キリスト教美術についての開催記念講演を催しました。

また、会期中の11月17日(木)には、関西学院高等部教諭(美術)の東浦哲也さんによる作品解説のギャラリートークを行いました。

展覧会報告 II

平常展

Gift for the Future 関西学院のあゆみ

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。



平常展

学院創立にかけた情熱

特集陳列

描かれた聖書-渡辺禎雄の版画-新収蔵品展

2016.4.1 (金) ▶ 5.28 (土)
9:30 ~ 16:30 (日曜休館)

開館日数 45日

平常展

学院を築いた4人の院長

特集陳列

新収蔵品展

2016.8.1 (月) ▶ 10.1 (土)
9:30 ~ 16:30(日曜、8月11、13~20日、9月19日休館)

開館日数 46日

平常展

学院の息吹・原田の森

特集陳列

復元研究よみがえる小袖-今と昔の職人技-

2017.1.16 (月) ▶ 3.25 (土)
9:30 ~ 16:30(日曜、2月1~7日、11日、3月20日休館)

開館日数 54日

学院の草創期

キリスト教主義教育の実現

「学院創立にかけた情熱」というテーマで、学院草創期の25年間(1889-1913)を紹介しました。アメリカ・南メソヂスト監督教会は、伝道者養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として神戸の原田の森で関西学院を創立しました。その後、カナダ・メソヂスト教会が学院経営に参加することで本学は発展していきます。その軌跡を兵庫県知事宛に提出した書類や、原田の森の神学館に据えられていたコーナーストーンからたどりました。また、今に受け継がれるスクールモットー「Mastery for Service」などのエピソードを紹介し、新年度らしい展示となりました。

イエスの生涯

版画でみる聖書の場面

渡辺禎雄(1913-1996)は布地ではなく和紙に型染を応用するなど型染の新しい展開を模索していた芹沢銈介に師事し、聖書の世界を独自に解釈した型染版画の作品を世に次々と送り出していました。その作品は、日本のみならず世界でも高い評価を受けています。

渡辺の解釈とは、聖書の世界を自身の体験や日常生活つまり日本の風土を基に読みなおすことでした。それは「最後の晩餐」で晩餐に出されている尾頭付きの鯛や握り寿司に象徴的です。見るとどこか親しみを感じる渡辺の作品から、イエスの誕生から復活までに関するものをご覧いただきました。

院長と学生たち

創立と発展、学院への想い

学院初期の4人の院長(W. R. ランパス、吉岡美国、J. C. C. ニュートン、C. J. L. ベーツ)がどのように本学を築いていったのか、当時の日記や手紙、書類などの資料を中心に紹介しました。それと併せて、同時期を中心とした学生のキャンパスライフも取り上げました。キャンパスライフに欠かせない学則、服制、寮生活などの資料をはじめ、吉岡が顧問役を務めた自給学生自助会の「牧乳搾取販売所」の印鑑やベーツが全教職員・学生を招待した午餐会の案内状といった院長と学生たちとの関わりに触れることのできる資料もご覧いただきました。

博物館への寄贈品

はじめてのご紹介

大学博物館では、開設準備室が開室した2008年から現在に至るまで様々な方面の方々から貴重な資料の数々をご寄贈いただきました。その中には、コレクションとしてまとまった形で寄贈いただいたものもあり、こうした資料はこれまでに開催した企画展覧会でその内容の一部をご紹介しました。しかし、これまで展示の機会を得ていない資料もたくさん存在するため、ご寄贈いただいた大切な資料の一部を皆さまにお披露目するために「新収蔵品展」を企画しました。「第26回関西学院グリーンクラブリサイタルプログラム」の表紙絵になった小磯良平の絵画や、西村元三朗の絵画、ガラス絵の日本人作家の作品を展示しました。

関西学院の礎

原田の森の歴史をたどる

本展示では、「学院の息吹・原田の森」というテーマのもと、学院創立の地、原田の森にキャンパスが置かれた約40年の歴史(1889-1929年3月)を取り上げました。アメリカ南メソヂスト監督教会のW. R. ランパスによって創立された本学は、アメリカと日本、カナダの教会が協力して学院を築いてきました。その発展の様子とそこで学ぶ学生たちの姿を紹介しました。さらに今回は展覧会開催期間中に行われる卒業式をテーマに、「卒業」をキーワードにして集めた資料を展示するテーマ展示を設けました。学院同窓の詩人竹中郁の卒業論文などをご覧いただきました。

大学で行われた研究の紹介

江戸時代の復元小袖の展示

同時開催の特集陳列では、2003年度から5年間にわたり、大学院文学研究科に設置されたアート・インスティテュートの研究成果である復元小袖(きもの)を江戸時代の小袖裂とともに紹介しました。アート・インスティテュートでは、江戸時代の染色技法を解明し、その伝統的な職人技の保存を目的に、江戸時代の小袖を復元する実証的な研究に取り組んできました。

開催期間中には、上記研究代表者を務めた本館館長・文学部教授の河上繁樹が「よみがえる小袖」と題して講演を行いました。本学が取り組む研究の一端を知っていただく機会になりました。



企画展 日中のかけはし - 愛新覚羅溥傑家の軌跡 -

2017年6月5日(月)～7月22日(土)の期間で、企画展「日中のかけはし - 愛新覚羅溥傑家の軌跡 -」を開催します。

生い立ち

愛新覚羅溥傑(1907-94)は、清の皇族として生を享けました。兄は中国・清朝最後の皇帝であり、後に「満洲国」皇帝ともなる溥儀(1906-67)です。溥傑は、清朝の再興を望む溥儀のもと、軍人として兄を支えるため、同盟国である日本の陸軍士官学校に留学します。一方、溥傑の妻となる嵯峨浩(1914-87)は、昭和天皇とも遠戚にあたる華族の令嬢として生まれ、女子学習院で学びます。

結婚から動乱の日々へ

この2人が、当時としては珍しい「国際」結婚に至った背景には、日本の軍部による関与がありました。すなわち、軍部による満洲への支配強化、延いてはいずれ2人の間に生まれるであろう子に、「満洲国」の皇位を継承させるという目論見があったのです。やがてこの結婚が、溥傑と浩、更には愛新覚羅溥傑家を数奇な運命へと導いていくことになります。



軍人会館での結婚式

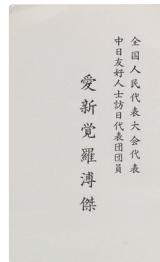
別離と、文通と再会

終戦の際に、溥傑はソ連軍に捕らえられ、浩は1年数ヶ月にも及ぶ中国での流転の旅を経験することになります。帰国後、離散してしまった一家を再び結びつけるべく長女の慧生が、溥

傑と手紙のやり取りが出来るよう中国の首相である周恩来に許可を願います。文通が許可され、中国に収監されている溥傑と日本にいる浩たちに小さなかけはしが生まれたのです。以後、溥傑の釈放や家族の再会を経て、一家は日中のかけはしとなっていきます。

溥傑家の使命

後年、溥傑は「笑顔常楽」の語を用い、平和の大切さを語るとともに、日中友好のかけはしとなることが愛新覚羅家に生まれた者の使命であると述べています。



溥傑の名刺

大学博物館への寄贈と企画展開催

関西学院大学博物館は、2013年10月に、溥傑と浩の次女である福永嫄生さんより愛新覚羅溥傑家に関わる書簡や写真、書画などの貴重な資料を受贈(一部受寄)しました。これをうけて、2015年5月～7月にかけて、企画展「愛新覚羅家の人びと - 相依為命(あいよっていのちをなす)」を開催しました。おかげさまで、好評を得ることができました。

日中のかけはし展

今回は、前回の企画展の資料に新たなものを加えて、激動の時代を生きぬいた愛新覚羅溥傑家の軌跡をたどります。特に、日中のかけはしとなるべき思いのこもった書簡等を展示します。

また、「満洲国」の時代を中心に、旅行案内書、旅券、地図などを通して、溥傑家以外の人々の満洲への認識についても触れます。

上記の展示品から、日中のかけはしについて考えていただきたいと思い、展覧会を企画しました。

過去の催し

2016 春学期・秋学期
展覧会 / 公開研究会

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ
- 学院創立にかけた情熱 -
特集陳列

描かれた聖書 - 渡辺禎雄の版画 -
2016.4.1 (金) ▶ 5.28 (土)

企画展

神々の宿る布
- 古代アンデスからのメッセージ -
2016.6.6 (月) ▶ 7.23 (土)

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ
- 学院を築いた4人の院長 -
特集陳列

新収蔵品展
2016.8.1 (月) ▶ 10.1 (土)

企画展

第40回キリスト教美術展
2016.10.8 (土) ▶ 12.17 (土)

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ
- 学院の息吹 - 原田の森 -
特集陳列

復元研究 よみがえる小袖
- 今と昔の職人技 -
2017.1.16 (月) ▶ 3.25 (土)

公開研究会

第2回
小袖裂をみる - 慶長小袖から友禅染 -
講師：高木香奈子 関西学院大学博物館学芸員
2017.3.14 (火) 13:30 ▶ 15:00
会場：F号館 102教室



関西学院大学博物館通信 第3号
KGU MUSEUM NEWS No.3

2017.4.1

関西学院大学博物館
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462
URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>